

平和のための教育

「平和のための教育」とは、要するに、「平和の人」を生み育てることであろう。シュワイツァーは自ら平和の人であり、その著書には随所に平和の人が描き出されている。その中から平和の人形成の教育の眼目というべきものを、幾つか取りあげて考えてみたい。

1. 集団と個人における個人の尊重

＜個人として、自由人として献身できる仕事を見つけないという希望＞をもって、生涯「ひとりで歩いたシュワイツァー」（野村実）は、＜個人の精神的倫理的価値＞を何よりも貴重とした。＜個人が集団に作用するよりも、集団がより強く作用するところでは没落が生じる。なぜなら、その上にすべてかかるところの真の偉大さ——すなわち個人の精神的倫理的な価値が必然的に侵害されるからである＞。

日本人は概して集団への同調同化を良しとし、他人と異なることはわるいと考え。しかし真の平和は、異質を排除して同質の社会を築くのではなく、異質の存在どうしが緊張をはらみつつも互いの異質性を認め、互いを受容するところにこそ成立するものである。平和教育の基本は、そのことに耐え得る＜高度の自律性＞を備えた個人を育てることに置かれるべきではないか。

2. 自分の幸福を自明のこととしない 強靱な精神力

＜自分は自分の幸福な少年時代と健康と活動力とを、自明のこととして受けとる内面的な権利をもっていない。人生において多くの美しいものを手に入れた者は、そのかわりにやはり多くのものを提供しなければならない＞。

この世の現実決して平等ではない。人と人との関係は社会力学的に絶えず変化する強者・弱者の関係である。強者が自分がたまたま強者の立場にあることを自覚する時に、平和は始まる。

人間関係は、しかし、外面的な社会力学的関係のみに止まらない。村の少年たちと一緒にあって、ユダヤ人マウシェをはやしたてたシュワイツァーは、彼の＜当惑げの、やさしい微笑に圧倒された＞という。それは少年にとって、迫害される社会力学的弱者が瞬時にして精神的強者へと一転する衝撃的出来事の開示であった。＜畏敬＞とはこの圧倒的経験への応答感情であり、人にこの経験を与えることをこそ＜平和＞教育と言うのであろう。そして平和は、社会力学的、とりわけ精神的「強者」が「弱者」に対して和解の手を差しのべるところに始めて成り立つのである。

3. 平和主義における抵抗と創造

かつてシュワイツァーは音楽家カザルスに、「抗議するよりも創造するほうがよいね」と言った。カザルスは「なぜ両方してはいけない？ 抗議は時によって、もっともむずかしく、もっとも要求するところが多い創造かもしれない」と答えたという。暗示的な会話だ。（『カザルスとの対話』から）

シュワイツァーもまた本質的に抵抗の人であった。＜わたしは世間で「成熟した人間」と考えられているものになることに、本能的に抵抗した＞。抗議＝抵抗は、現実を広い視野をもって深く、洞察し、知識と思惟を通して真実を明晰に把握する能力の根源である。

抵抗は創造を生む。＜惨めな現実があるがままに見ることを断じて恐れない＞シュワイツァーは、それゆえに＜現代においては、暴力が虚言の衣裳をまとして、かつてなかったほど気味わるく世の中に君臨しているけれども、わたしは依然として、真理、愛、寛容、温厚、親切があらゆる権力にまさる権力であると確信している＞のである。

この確信が、彼に半世紀にわたるランバネでの仕える生活——批判と中傷にも耐えて、どこまでも柔和に、静かに平和を創り出す創造的生——を可能にしたのであろう。

4. 内的平和の追求と外的平和のための努力

＜おごそかなものにひかれる気持ち、

それから静寂と心の落ち着きを求める心、わたしはこの二つをぬきにしては自分の生活を考えることはできない＞。これがシュワイツァーの内的平和であり、この内的平和のごく自然な発現が＜生への畏敬の倫理＞であろう。

＜殺したり苦しめたりすべきではないといういましめは、このようにして（小鳥うち事件）わたしの心に働きかけたのであって、この大きな体験にくらべれば、他のいっさいの体験は影が薄い＞。＜自分はけっして鈍感になるまい、センチメンタルという非難をけっして恐れまい＞という彼の気持ちを、私はシュワイツァーの「平和主義」「非暴力抵抗の思想」と呼びたいと思う。

5. 平和の習慣形成としての生への畏敬の倫理

平和は平和への意志であるとともに、平和の習慣を形成することである。＜生への畏敬）はそれが倫理（エトス＝習慣）であることによって、それに生きる者を確実に平和の人にしていく。

＜生への畏敬の倫理は、すべての人々がその生命の一端を人々に献げることを願う。どのような仕方で、どのような程度に、それが彼に課せられているかは、各人がおのれの中に生ずる思想と、おのれの人生をめぐっている運命からくみとらなければならない。何を犠牲として提出すべきかは、各人の秘密である＞。

平和の習慣とは「正義」の遂行であり、教育とはこの正義を個人的に、社会的に訓練することである。＜生への畏敬の倫理＞は、人にこの訓練を、シュワイツァー自身の自己訓練のように、秘やかに慎ましく行わしめる。かくして、少しずつ「平和の人」が育成されていくのである。

(所載)

『ランバレネ』第 100 号

シュワイツァー日本友の会

1990 年 12 月